

## 社会的再生産論よりみた地域社会論(8) ——新しい「都市」と「農村」の関係を求めて——

内 田 司

---

### 要 約

現在の地域社会研究においては、もはや、都市・農村の対立の止揚を課題とするのは、時代錯誤的になったと言われてきた。日本においても、とくに高度経済成長期以降の地域社会の激変ともいえる変動が、実体としての都市・農村を解体してしまったとみられている。連載からなる本稿は、そうした地域社会研究の課題をめぐる主張の批判的検討を行うことを課題としている。そして、グローバル化している現代資本主義の発展にもとづく地域的不均等発展の深化によってもたらされているさまざまな問題——世界的な南北問題と紛争問題、過密過疎問題、都市問題、環境・エネルギー問題など——を解明するためには、都市・農村の対立を止揚するという視角は、現代地域社会研究にとって重要な視角であることを立証したい。その一環として、本論文では、都市・農村の対立を主題としてきた社会理論の理論的系譜を辿る一環として、マルクスの再生産理論を検討している。

キーワード：グローバル化、近代化、地域的不均等発展、都市・農村の対立

### 目 次

#### 序 問題の所在

#### 第一章 地域社会研究における都市・農村研究からリージョン研究への移行

##### 第1節 福武直氏の農村社会研究(65号)

##### 第2節 羽仁五郎氏の都市研究(66・67号)

##### 第3節 都市・農村研究からリージョン研究へ(68号・69号)

#### 第二章 社会的再生産論よりみた都市・農村関係論

##### 第1節 ケネーの都市・農村関係論(70号)

##### 第2節 アダム・スミスの都市・農村関係論(72号)

##### 第3節 マルクスの都市・農村関係論(本号)

#### 第三章 アジット・シンとハミッド・タバタバイの「発展途上国」の農業と経済の発展論

#### 結 語 新しい都市と農村の関係を求めて

## 第二章 社会的再生産論よりみた都市・農村関係論

### 第3節 マルクスの都市・農村関係論

#### マルクスのプルードン批判

ここでは、人間の物質的生活の社会的再生産に関する理論的發展の中で展開されているマルクスの都市と農村の関係を検討することを課題としている。マルクスの社会的再生産論の

キーワードは、資本主義的生産様式である。そして、この資本主義的生産様式に関わるキーワードとして、大工業制・不均等発展・無政府性・社会的対立などが挙げられる。そこでまず、この点を、自然をキーワードに社会的再生産論を展開していたケネーや労働をキーワードにして社会的再生産論を展開していたアダム・スミスとの対比で確認することに着手したい。その端緒として、そのことはマルクスの社会的再生産論の理論的特徴と深く関係すると思われるがゆえに、彼のアダム・スミスを代表とする近代経済学批判に耳を傾けたい。

マルクスによれば、スミスを代表者とする近代経済学者たちの資本主義経済理論の最大の特徴の一つは、資本主義経済制度を自然的制度として永遠化しようとする点にあった。彼らは、資本主義に先行する時代の経済体制を人為的制度と特徴づけ、資本主義経済制度の特徴と対比することによって、資本主義的経済制度の優位性を立証しようと企図していたのである。試みに、アダム・スミスの資本主義経済体制の下での地域的均等発展論の主要論点を再確認してみよう。その論点とは、私的利益の自由で、競争主義的な追求を原理として成立している市場経済制度の下での「生産と消費との均衡」および地域的均等発展の可能性に関わるものである。結論から言えば、これらの論点に対するアダム・スミスの主張は、唯一自然必然的経済法則だけが人々の経済行為を規制している自由競争主義的市場経済の下でこそ、「生産と消費との均衡」および地域的均等発展は実現する可能性が開かれるというものであった。別言すれば、スミスによれば、「生産と消費との均衡」および地域的均等発展を害なうものは、権力者および商人・製造業者・輸出入業者たちの、自由で平等な競争を排除し愚劣な不正をはたらく私的な利害関係と独占の精神という人為的要因であった。スミスによれば、そうした人為的要因により、社会的利益の不平等で不均衡な分配が行われることで、不平等で不均等な経済生活と社会関係が生じ、「生産と消費との均衡」を攪乱するのであった。それゆえ、スミスによれば、政治の経済への介入を廃し、自由競争主義的市場経済の原理が純粹に作動する社会的条件を実現し、それらの人たちの愚劣な不正をはたらく私利利害関係と独占の精神の影響を無くすことさえできれば、地域的均等発展だけでないあらゆる人間的・社会的関係の平等的で均等的発展が実現し、それにともなって、自ずと「生産と消費との均衡」も実現するはずであった。すなわち、スミスによれば、自由競争主義的市場経済の下でこそ、今日の生活の心配をしなければならないような貧困を根絶し、経済的豊かさを実現するとともに、自由・平等・博愛の原理による理想社会が実現するはずであった。それゆえ、勤勉と慎慮（「善行」）・脱権威主義、脱自己優先主義と正直（「正義」）・自律（「自己支配力・自己命令力」）を徳とする経済倫理こそ、アダム・スミスの経済学の生命線であったのである。換言すれば、アダム・スミスの経済学は、道徳に基礎を置いた経済学であった。

かかるアダム・スミスに代表される近代経済学の性格は、マルクスによれば、より一層際立った形でブルードンに継承されているという。しかも、ブルードンは、アダム・スミスやその継承者であるリカードたちとは違って、資本主義的経済の矛盾に気づいていただけでなく、その

止揚を意図していたにもかかわらず、そうであったのである。ブルードンにとって資本主義的経済の矛盾とは、なによりも、アダム・スミスたちの労働価値説によれば経済的富の眞の生産者であるはずの労働者たちの生活を貧しくし、むしろ生産活動に何ら従事しない資本家や土地所有者たちの生活を豊かにするだけでなく、資本家たちによる労働者たちに対する支配関係を生み出していることに表現されていた。かかる矛盾をブルードンはどのように止揚しようとしたのであろうか。マルクスによれば、ブルードンは、アダム・スミスやリカードたちと同じく資本主義的経済法則の自然性、すなわちその永遠性を認めた上で、しかし他方では資本主義経済には「よい面」と「悪い面」の両面があることを指摘し、「悪い面」だけを除去することによって「よい面」だけを発展させることによってしようとした。では、資本主義経済の「悪い面」はいかなる理由で生じるのであろうか。ブルードンによれば、それは人々が資本主義経済を正しく認識していないことによって生じるものなのであった。それゆえ、資本主義経済の矛盾の止揚は、ただ人々がブルードンが明らかにした資本主義経済法則の眞理を学び、正しく認識しさえするならば、たちどころに実現するはずのものだったのである。マルクスはそうしたブルードンの資本主義経済の止揚論を徹底的に批判しているが、それはブルードン批判ということにとどまらず、近代経済学批判、しかも、それらに対置する自己の資本主義的経済理論の特徴が際立つ形でうかがい知ることのできる近代経済学批判でもあったのである。そこで、ここでは、『哲学の貧困』の中で展開されている、マルクスによるブルードンの資本主義経済の矛盾の止揚論批判を検討してみたい。

まず、その検討を、マルクス自身は、自己の資本主義的経済理論と資本主義経済に基礎を置く社会止揚後の新しい社会（「共産主義社会」）要求との関連をどのように構想していたのかを確認することから開始することにした。この点に関しては、『哲学の貧困』の「ドイツ語第一版序文」におけるエンゲルスの次の一文がブルードンと比較してのマルクスの構想の特徴を明瞭に表現している。そこで、少々長くなるが、今後の検討で重要となるので、その全文を引用することにした。エンゲルスいわく、「労働者たちだけが眞の生産者であるから、彼らの生産物たる社会的生産物はそっくり全部彼らのものであるとおしえるリカード理論の前述のような応用は、まっすぐに共産主義に通ずるものである。しかし、マルクスがさきに示唆しているように、これもまた経済学上からいえば形式的にまちがっている。なぜなら、これはただ道徳を経済学に適用することにすぎないからである。ブルジョア経済の法則によれば、生産物の大部分はそれをつくりだした労働者たちのものにはならない。だからといって、そんなことはただしくない、そんなことがあってはならない、などとわれわれがいったとしても、それは経済には無関係である。われわれはただ、このような経済的事実はわれわれの道徳感と矛盾している、といっているにすぎない。であるからこそ、マルクスはけっして彼の共産主義的要求の基礎を道徳感においたためしはなく、われわれの眼前で日ごとに実現の度をましつあつたところの資本制的生産様式の必然的崩壊のうえにおいたのである。彼はただ、剰余価値は不払い

労働よりなる、と——これは純然たる事実だ——言っているだけである。しかし、経済学的見地から見れば形式的にまちがいでありうることも、世界史の見地から見ればやはりただしいことでありうる。大衆の道德意識が一つの経済的事実を、昔なら奴隷制ないし農奴制を、ただしくないものとみなすばあい、これは、その事実そのものが一つの遺物であること、ほかの経済的諸事実が発生し、それらのためにまえの事実がたえがたいもの、支持されがたいものになったことを証明する。ゆえに、経済学上の形式的な誤りの背後に一つのきわめて真実な経済的内容がかくれていることがありうる<sup>(1)</sup>〔傍点や（ ）は、以下断りのない限り原文による〕と。

この引用文にある、エンゲルスによれば、経済的事実を自分たちの道德感と矛盾すると単に批判するだけのプルドンの経済学と根底的に異なるマルクスの経済学とはどのようなものと理解すればよいのであろうか。その第一の基本的違いは、資本制生産様式から生じる経済法則を自然性的なもの、それゆえ永遠の法則と見るかどうかというところにある。マルクスは、プルドンの著作である『貧困の哲学』を徹底的、批判的に吟味し、それを次のような批判でまとめている。「こうして、彼（プルドン）は、これらの経済的範疇を永遠の法則とみとめ、生産諸力のある一定の発展にだけあてはまる法則である歴史的な法則とみとめないブルジョア経済学者の誤謬におちいった」<sup>(2)</sup>〔（ ）内は引用者による〕と。それに対し、マルクスは、「そのもとの人間が生産し消費し交換する経済形態は、暫時的であり、歴史によって制約されている」<sup>(3)</sup>のであり、資本主義生産様式もその例外ではありえないのであった。生産様式とそこから生み出される経済法則は自然的であり、永遠であるので、プルドンはその変革の必要は認めない。ただ、彼の道德感と矛盾する経済的事実を生み出す要因である資本制経済の誤った認識を改めることを求めるだけである。これに対し、マルクスは、資本制生産様式もそこから生み出されている経済法則も歴史的なものとして、人々の手によって変革されずにはいられないと把握するのである。では、マルクスは資本制生産様式とそこから生じる経済法則が変革されずにはおれないということ、理論的にはどのようにして立証しようとしたのであろうか。

エンゲルスによれば、マルクスのその理論的立証の方法とは、「われわれの眼前で日ごとに実現の度をましつつあるところの資本制生産様式の必然的崩壊」<sup>(4)</sup>を証明するというものであった。かかる方法の視点から見れば、資本制生産様式の現実的な運動、その運動を学問的用語によって表現する経済学の諸範疇、そして人々の日常の生活意識（資本家・地主・「大衆の道德意識」なども含む）というこれら三者のプルドンによる関係把握の方法も批判されなければならないものであった。まず、マルクスの批判に従ってプルドンの資本制生産様式の現実的な運動と経済的諸範疇の関係把握の方法を見るならば、それは資本制生産様式の現実的運動とは、「神、普遍的理性、人類の非人格的理性」<sup>(5)</sup>によって創造された観念としての経済学的諸範疇の産物に他ならないというものである。さらに言えば、経済学的諸範疇が資本制生産様式の現実的運動を生み出しているのである。次に、その経済学的諸範疇と人々の日常意識との関係把握の方法に目を転じるならば、プルドンは、人々は彼らの日常生活の中で経済学的

諸範疇を認識することになるが、しかしその認識は正しいものとは限らず、多々間違っただけで認識するものと把握していたという。そして、そこに経済学的諸範疇と資本制生産様式の現実的な運動との間の矛盾が発生する要因が存在しているのであった。なぜならば、現実の資本制生産様式の運動は、一方では人々の日常の生活活動によって形成されるものでもあったからである。すなわち、人々は、経済学的諸範疇を正しく認識しないまま彼らの日常の生活活動を行うことによって、経済学的諸範疇と矛盾する資本制生産様式の運動を生み出してしまっているのである。それゆえ、プルードンによれば、人々が経済学的諸範疇について「ただしい意識をもちさえすれば真理を所有することができる」<sup>(6)</sup>はざであった。

かかるプルードンの資本制生産様式の現実的運動、経済的諸範疇、そして人々の日常生活意識の三者間の関係把握に対して、マルクスは次のように批判する。すなわち、マルクスによれば、「経済的諸範疇は、社会的生産諸関係の理論的表現、その抽象であるにすぎない」<sup>(7)</sup>のである。かかる見方からすると、「プルードン君は真の哲学者として、ものごとをあべこべに解釈し、現実的諸関係をば、これまた哲学者プルードン君のわれわれにかたるところによれば、『人類の非人格的理性』の胸裡にまどろんでいたところのあの諸原理、あの諸範疇の化身としか考えないので」<sup>(8)</sup>あった。また、経済的諸範疇と人々の日常の生活意識との関係把握について言えば、マルクスは、「物質的生産力に応じて社会的諸関係を確立するその同じ人間が、彼らの社会的諸関係に応じて諸原理、諸観念、諸範疇をもまたうみだす」<sup>(9)</sup>と論じていた。すなわち、マルクスは、経済学的諸範疇も人々の日常生活意識とともに、人々の生活活動の所産として同質的性格を有しているものであった。さらに言えば、マルクスによれば、資本制生産様式の現実的運動も、その理論的抽象にすぎない経済学的諸範疇も、そして人々の日常の生活意識もすべて、人々の日常の生活活動によって生み出されているものなのであった。それゆえ、理論的には、人々は、自分たちの日常の生活活動のあり方を変えることによって、資本制生産様式の現実的運動を、その理論的抽象である経済学的諸範疇を、そして自分たちの日常の生活意識を変えるものなのである。それをマルクス自身のことばで確認しておくならば、それは、「経済学者たるプルードン君は、人間が一定の生産諸関係においてラシャ、麻布、絹布を製造するものであることを非常によく理解した。しかし、これらの一定の社会的諸関係もまた麻布、リンネル等々と同様に人間によって生産されるものであるということ、それを彼は理解することができなかつた。社会的諸関係は生産諸力に密接にむすびついている。あらたな生産諸力を獲得することによって、人間は彼らの生産様式を変える。そしてまた生産様式を、彼らの生計の立てかたを、変えることによって、彼らは彼らのいっさいの社会関係を変える」<sup>(10)</sup>のものであった。同じくマルクスによれば、そのようにして、「彼らの物質的生産力に応じて社会的諸関係を確立するその同じ人間が、彼らの社会的諸関係に応じて諸原理、諸観念、諸範疇をもまたうみだす」<sup>(11)</sup>のものであった。

資本制生産様式の現実的運動、経済学的諸範疇、そして人々の日常の生活意識の三者を、以

上見てきたように人々の日常の生活活動を媒介項として関連づけるマルクスの目から見れば、永遠の法則とされる経済学的諸範疇は何ら変化することなく（結果としてそれらの経済学的諸範疇が生み出している現実的な生産諸関係も何ら変化することなく）、ただそれらにたいする人々の認識が変わる（すなわち、経済学的諸範疇を正しく認識する）だけで、人々の日常生活意識が変わり、そのことによって人々の日常の生活活動が変わり、それまで不平等な富の分配を生み出してきた資本制生産様式の現実的運動も平等な富の分配を生み出すような運動に変化するとするプルードンの主張は、空想以外のなものでもなかった。マルクスによれば、そもそも人間はその認識の仕方を変えれば簡単に自分たちが住んでいる社会を変えることのできる自由を持ち合わせてはいないのである。むしろ、通常、人間はある生産力に照応した生産諸関係の規制の下で、それらの生産諸関係に適応する形での自分たちの日常的生活活動を行い得るだけなのである。ただ、人間が新たな段階の生産諸力を獲得したときにのみ、その生産諸力に照応する社会に変革することができるだけである。ただし、そのときには、当然、以前の生産諸関係やその抽象化された表現である経済学的諸範疇も変革されずにはおけないものなのである。

マルクスのかかる視点は、例えば「生産と消費の対立」に関するプルードンの説に対する批判の中にも見て取ることができる。マルクスによれば、プルードンは、「生産と消費」、「需要と供給」、そして「『使用価値と交換価値とのあいだの対立をひきおこすものは人間の自由意志である……』」<sup>(12)</sup>と主張していた。この主張に対しマルクスは、「生産者は、分業と交換に基礎をおく社会のなかで生産した以上——といっても、これはプルードン君の仮説なのだが——売ることをよぎなくされている。プルードン君は生産者を生産諸手段の支配者たらしめる。しかし、彼もわれわれとともにみとめるであろうが、生産者の生産諸手段は自由意志に依存するものではない。のみならず、これらの生産手段は大部分外部から生産者のもとにやってくる生産物であり、しかも近代的生産においては、生産者は自己の欲するだけの分量を生産することすら自由にはできないのである。生産諸力の発展の現段階は、生産者をしてあれこれの規模で生産することをよぎなくさせるのである」<sup>(13)</sup>と批判する。さらに、マルクスは続けて、「消費者もまた、生産者と同様に自由ではない。彼の資力と彼の欲望とにもとづいている。彼の資力と彼の欲望とは彼の社会的地位によって決定され、この社会的地位それ自体は社会組織全体に依存する。いかにも、馬鈴薯を買う労働者とレースを買う娼婦とは二人とも彼らそれぞれの所見にしたがう。しかし、彼らの所見の相違は社会のなかで彼らのしめる地位の相違によって説明される。しかも、この社会における地位なるものは社会組織の産物なのである」<sup>(14)</sup>と自己の見解を展開している。そして、これらの「生産と消費の対立」は自由な生産者と自由な消費者の意志の対立から生じるとするプルードン説の批判のまとめとして、マルクスは、資本制生産様式の下ではとくに、「全世界の商業は、ほとんど全部、個人的消費の欲望にではなく、生産の欲望にもとづいていとなまれる」<sup>(15)</sup>ものなのであると主張するのである。

以上のマルクスによるブルードン批判から、資本制生産様式の現実的運動、経済学的諸範疇、人々の日常の生活意識、そしてそれら三つの要素を統合する媒介の役割を果たしている人々の日常の生活活動の連関構造分析におけるマルクスの新たな論点が表明されているのである。それは、生産諸力の発展の原動力は生産者の自由意志や消費者の消費欲望などでは決してなく、生産者の意志の如何にかかわらず生産者に生産様式や生産量の大きささえをも強制してくる生産諸手段のあり方と市場経済の下で展開される生産者間、消費者間、そして生産者と消費者間における競争と闘争という生産関係要因であるという論点である。マルクス自身のことばでこのことを確認しておくならば、経済学的諸範疇の一つである交換価値、または売買価値が資本制生産様式の現実的運動の中からどのようにして生じてくるのかを論じ、次のように展開していた。すなわち、「現実の世界にあっては、……供給者間の競争と需要者間の競争とが買手売手間の闘争の必須的一要素を形成し、その結果として売買価値が生じるのである」<sup>(16)</sup>と。かかる論点は、生産諸力の発展とそれに照応する社会の発展がどのような現実的運動に媒介されて展開していくのかという問に対し回答を与えることになる。

マルクスが、社会の発展段階は生産諸力の発展段階に照応すると主張していたことはすでに見てきた。さらに言えば、マルクスは、社会の発展段階は生産諸力の中核的要素である生産諸手段の発展段階に照応すると主張していた。一例を挙げれば、「手動粉挽車は諸君に封建君主をもつ社会をあたえ、蒸気粉挽車は諸君に産業資本家をもつ社会をあたえるであろう」<sup>(17)</sup>とマルクスは述べていた。ここの引用文だけ取り出して教条的に論じるならば、マルクスはこの引用文章の中であたかも、「手動粉挽車」が封建社会を与え、「蒸気粉挽車」が資本主義社会を与えるとすれば、例えば、コンピュータ装置付きの電動粉挽車は社会主義社会を与えているのであろうか。もしそう受け取ることができるとするならば、「手動粉挽車」の時代に「蒸気粉挽車」が発明され、「蒸気粉挽車」の時代にコンピュータ装置付きの電動粉挽車が発明された時に、どのようにしてそれらの発明に応じて社会が変化していくのであろうか。そうした生産手段の発展は、自然必然的に、すなわち人々の社会を変革する努力なしに自動的に社会の変化を起すというのであろうか。こうした疑問が起り得ることを念頭において、ここで問題にしている引用文につづくマルクスの議論の展開を追ってみよう。

マルクスは、その引用文に続く議論において、生産諸手段の発展がその発展に照応する社会の発展へと連なる流れの中には、「生産諸力においては増大の、社会的諸関係においては破壊の、諸観念においては形成の、不断の一つの運動が存在する」<sup>(18)</sup>ことを主張していた。これまで検討してきたマルクスの議論を踏まえるならば、その主張は、マルクスが、人間は新しい社会を建設することを自己目的として生きている、または日々の生活活動をおくっているということを主張しているのではないことは確実である。むしろ、マルクスは、人間は、例えどんなに新しい社会を希求したとしても、その社会的条件を欠いている時に、自由意志にもとづいて自由自在に新しい社会が建設できるものでは決してないことを主張していたのである。すなわち

マルクスによれば、人間は所与の生産諸手段の発展によって条件づけられている生産諸力とそれに照応する生産関係によって規制を受けながら自己の生命活動を全うするだけなのである。例えば、分業と競争が普遍化している資本制生産様式の下では、人間諸個人は、自分たちの経済生活の破綻を免れるためにも、生産者間、消費者間、そして生産者と消費者間の競争と闘争を勝ち抜き、より大きな利益をあげるために生活活動を行っているだけである。より一般化して言えば、人間たちは既成の社会の中でその社会における生産諸力とそれに照応する生産諸関係の規制の許す範囲で自分たちのよりよい生活の実現のために生産・消費の活動を行っているのである。だとするならば、どのようにして生産諸手段の発展が社会の発展へと繋がっていくというのであろうか。マルクスのこの問に対する回答は以下のようなものであった。マルクスいわく、人々は所与の条件の下で自分たちのよりよい生活実現のための生産・消費活動を行っているだけだとしても、その人間たちによる生活実現のための生産・消費の活動が、生産諸手段の改良と発展を生み出し、彼らの意図せざる結果として、生産諸力を増大させ、既成の社会的諸関係を破壊し、人々の日常の生活意識の上では破壊されつつある既成の社会的諸関係に代る新たな社会的諸関係を建設することを促す社会形成的な諸観念を生み出していく、不断の運動を創り出していくのであると。

ここでマルクス自身のことばで、かかる運動における生産諸力の発展、社会形成的な諸観念、そして社会の歴史的展開の関係性に関するブルードン批判を確認しておこう。すでに見てきたように、ブルードンは、「現実の歴史、時代の順序にしたがった歴史は、(生産諸力の発展段階とはかかわりのない) 諸観念、諸範疇、諸原理がそのなかに自己を顕現したところの歴史的継起である」<sup>(19)</sup>〔( )内は引用者による〕と見ていた。すなわち、「権威原理は一一世紀をもち、同様に個人主義原理は一八世紀をもった」<sup>(20)</sup>のである。こうしたブルードンの社会の歴史的発展観に対して、マルクスは次のように批判する。「なぜ、かくかくの原理が他のかくかくの世紀よりも一一世紀または一八世紀に自己を顕現するほうがよかったのか、と自問するならば、必然的につきのような諸問題を綿密に検討しないわけにはゆかない、——〔すなわち〕一一世紀の人間はどのようなものであったか、一八世紀の人間はどのようなものであったか、彼らのそれぞれの欲望、彼らの生産力、彼らの生産様式、彼らの原料はどのようなものであったか、要するに、これらいっさいの存在諸条件より生ずる人間対人間の諸関係はどのようなものであったか? これらの問題のすべてを深く研究することは、それぞれの世紀における人間たちの現実の俗界の歴史をうみだすことでは、これらの人間をば彼ら自身の戯曲の作者であると同時にその俳優でもあると主張することではないのか? ところが、人間を彼ら自身の歴史の俳優兼作者なりと主張するやいなや、諸君はまわり道をしてほんとうの出発点に到着したことになるのである。なぜなら、諸君は当初にかたっていた永久的諸原理なるものを放棄してしまったのだから」<sup>(21)</sup>と。

### マルクスの資本主義的生産様式の理論

いよいよ人間社会の歴史的発展の出発点に至った。そこで、次に、人間による新たな生産手段の開発を契機として、新たな生産諸力の増大→生産様式の変革→生計の立て方の変革→その他いっさいの社会的諸関係の変革という人間社会の歴史的発展過程をマルクスがどのように把握しようとしていたのかを見てみることにしたい。その際、資本主義経済法則を自然的なものであり、それゆえ永遠的なものと見たブルジョア経済学者たちやプルードンを批判し、資本主義経済も生産諸力の一定の発展段階にのみあてはまる歴史的なものにすぎないと見たマルクスは、資本主義社会の移行過程をどのように論じようとしたのかを例に取り上げ検討をすすめることにしたい。そして、そのことを検討することは、「われわれの眼前で日ごとに実現の度をましつつあるところの資本制生産様式の必然的崩壊」<sup>(22)</sup>をマルクスはどのように論じたのかを検討することでもある。

そのためには、まず資本主義社会において獲得された新たな生産力とはどのようなものかということを確認しなければならないであろう。その出発点は、資本主義社会に固有の生産手段とは何かということである。マルクスによれば、それは「機械」であった。しかも、手動式の機械ではなく、原動機付きの自動機械であった。すなわち、マルクスによれば、「手動粉挽車は諸君に封建君主をもつ社会をあたえ、蒸気粉挽車は諸君に産業資本家をもつ社会をあたえる」<sup>(23)</sup>のであった。ただし、マルクスは、「機械」を経済的範疇と見、分業一般から出発し、分業の悪い面、すなわち細分化された労働を止揚するために発明され、「『機械によって、[細分された]労働者の復興がもたらされるであろう』」<sup>(24)</sup>と主張するプルードンを批判し、次のように論じている。「機械が経済的範疇でないのは、鋤をひく牛が経済的範疇でありえないであろうのと同様である。機械は一つの生産力であるにすぎない。機械の応用に立脚する近代工場が一つの社会的生産関係であり、一つの経済的範疇なのである」<sup>(25)</sup>と。では、かかる機械の応用に立脚する近代工場制度と分業との関係について、マルクスはどのように論じていたのであろうか。この点に関しては、先にも指摘したようにプルードンは、機械は工場の外に存在する分業の止揚のために発明されたと見た。ただし、プルードンがそう主張する時の分業とは工場制度に先立つ社会的分業のことであった。同じプルードンによれば、そうした社会的分業は機械を応用して生産を行う工場で総合され、止揚されるが、その工場内には「権威の原理」によって秩序づけられた新たな分業が産み出されることになるのであった。その結果、そうした秩序が貫徹した工場働く労働者は工場を経営する「主人」に従属する「人足」の地位に墮落させられ、賃金制度が成立することになったのである。

かかるプルードンの議論に対し、マルクスは、近代工場制度に先行する社会における社会的分業はプルードンが言うように決して無秩序で、バラバラに存在していたわけではなく、むしろ権威主義的に秩序立てられていたのであり、近代工場制度の成立以降に工場の外の社会的分業は工場内の「権威の秩序」とは反対の無政府的な自由競争によって律せられる世界に変貌す

ることになったと批判するのであった。マルクスいわく、「族長制度のもとでも、カースト制度のもとでも、封建的同業組合制度のもとでも、固定した諸規定にしたがって、社会全体に分業がおこなわれていた」<sup>(26)</sup>。このように、「社会全体は、社会にもまたその分業があるという点で、工場の内部と共通点をもっている。近代的工場における分業を典型とみなして、これを一つの社会全体に適用するならば、富の生産にとってもっともよく組織されている社会は、むしろ、たった一人の企業家だけがかしらにたち、その人があらかじめ定められた規定にしたがって共同体のさまざまな成員に仕事を分配する社会であろう。しかし、事実はけっしてそうではないのである。近代的工場の内部では企業家の権威によって分業が綿密に規定されているのに反して、近代社会には、労働の分配について、自由競争以外になんらの規定も権威もないのである」<sup>(27)</sup>と。そして、これら工場内の分業と工場の外の社会的分業との関係を総括して、マルクスは次のように述べる。「われわれは一般的につきのような定義をくらすことさえできる、権威が社会の内部の分業を支配することがすくなくなくなるほど、分業は、工場の内部ではますます発達し、そしてそこでただ一人の権威にますます服従するものである、と。だから、工場における権威と社会における権威とは、分業については、相互に反比例しているのである」<sup>(28)</sup>と。

では、マルクスは、ここまでの議論の中で出てきた資本主義的生産様式の諸要素、すなわち機械（の発明）、工場内および社会的分業、市場、賃労働と資本という生産関係、工場内の権威的秩序、社会（市場）における競争と無政府的秩序などなどの諸要素は、歴史的にはどのような相互関連によって発生してきたと把握していたのであろうか。マルクスは、それを、「マニュファクチュア工業の形成」<sup>(29)</sup>を例にとって説明している。その議論を簡潔にフォローするならば、まずマルクスがマニュファクチュア工業の成立史で重視した歴史的條件は、「アメリカの発見とアメリカの貴金属の導入とによって容易になった資本の蓄積であった」<sup>(30)</sup>。それは、商品流通の拡大、植民制度、そして海洋貿易の発達をもたらした。一方で、封建制度の解体化が起こった。それは、封建領主から解雇された従者たちの浮浪者化と、「耕地の牧場への転化と、土地の耕作にまえほど労力がいらなくなった農業の進歩」<sup>(31)</sup>による農民たちの浮浪者化を生み出した。それら浮浪者たちは都市に流れ込んでいった。また、封建制度の解体は資本家階級の台頭とそれに伴う階級間の力関係と社会的地位の変動を意味した。すなわち、「地主階級と労働者階級とが、封建領主と民衆とが、おちぶれただけそれだけ資本家階級が、ブルジョアジーが、のしあがったのである」<sup>(32)</sup>。

かかる歴史的條件の下、拡大した市場の要求に対応する大規模な生産の必要が起こった。かかる必要は、拡大した通商と海洋貿易で富を蓄積した商人たちの手による「[生産] 用具および労働者の蓄積と集中」<sup>(33)</sup>によってマニュファクチュア生産を登場させた。そして、このマニュファクチュア生産は、作業所内の分業を発達させ、工場制生産に発展していくことになるのである。すなわち、工場内における「分業の発達は、一工場への労働者の集合を前提要件と

する。……ひとたび人間と〔生産〕用具とが集結されるや、同業組合の形態で存在していたような分業が必然的に工場の内部に再現し反映<sup>(34)</sup>することになったのである。このように、マルクスによれば、ここまで見てきたような「市場の拡大、資本の蓄積、諸階級の社会的地位に突発した変動、その収入の源泉をうばわれたおびたしい人間、これらはいずれもみなマニュファクチュアの成立のための歴史的条件である。ブルードン君のいうように平等者間の合意的契約が人間を工場内にあつめたのではなかった<sup>(35)</sup>」のである。そして、同じくマルクスによれば、「旧来の同業組合の胎内から、マニュファクチュアがうまれたのでもない。近代的工場の指揮者となったのは商人であって、同業組合の旧来の親方ではなかった<sup>(36)</sup>」のである。

こうして成立したマニュファクチュアは、「手労働だけではもはや市場の要求を充たすことのできないほど市場が発達する<sup>(37)</sup>」という歴史的条件と相俟って、機械の発明と工場における生産への応用の社会的必要の温床となったのである。マルクスが機械を論じるとき依拠したバページによれば、「『分業によってそれぞれの個別的な作業が簡単な一用具の使用に化してしまったとき、唯一の原動力によってうごかされるこれらの用具いっさいの結集が構成する……機械……』<sup>(38)</sup>」が発明されることになったのである。そして、マルクスは、機械は「分業」（近代以前の社会的分業）の総合であり、止揚であると考えたブルードンとは反対に、機械とその応用による工場制生産こそが、近代に特有の「分業」（工場内分業および社会的分業）を強力に押し進めると見たのであった。マルクスは言う、「ブルードン君にとっては、労働用具の集中は分業の否定である。現実のなかにわれわれはもう一度、その反対の事実を見いだす。〔すなわち〕用具の集中の発達につれて分業もまた発達し、分業の発達につれて用具の集中もまた発達する。このために、機械装置のあらゆる大発明のつぎにより大きい分業がおこなわれ、分業におけるそれぞれの発達が今度はまた機械装置のあらたな諸発明をもたらすことになるのである<sup>(39)</sup>」と。それは、工場内労働の細分化と単純化を限りなく推し進め、近代工場制度に特有の分業を生み出すことになるのであった。「要するに、機械の導入によって、……工場内部における労働者の労働が単純化され、資本が集結され、人間がよりいっそう寸断された<sup>(40)</sup>」とマルクスは主張するのである。しかも、同じくマルクスによれば、機械の発明と分業の発展のかかる相互作用は、ただ単に工場内の分業に止まるものではなく、社会的分業（含む産業間分業・地域間分業および国際的分業）をも近代社会に特有な形で発展させることとなるのであった。この点をマルクス自身のことばによって確認すると、「機械の発明は製造工業と農業との分離をなしとげた。そのすこしまえまでは、たった一つの家庭のなかでいっしょになっていた機械工と紡績工とが、機械のためにちりぢりにひきはなされた。機械のおかげで、機械工が東インド諸島にくらすのと時を同じうして、紡績工はイギリスに住むことができるのである。機械が発明されるまでは、一国の工業は主として自国の土地の生産物である原料をもとにしておこなわれていた。だから、イギリスにおいては羊毛が、ドイツにおいては亜麻が、フランスにおいては絹と亜麻が、東インドと地中海東部沿岸地方においては綿花が、産業のもとになっ

ていたのである。機械と蒸気との応用のおかげで、分業は、大工業が本国の土地から離脱して世界市場、国際交換、国際分業にだけ依存するほどの大規模に達することができた。最後に、機械は、なんらかの製品を製造するにあたって機械装置を一部分ずつ採用する手段が発見されれば、製造がただちに相互に独立した二つの経営にわかれるほどの大きな影響を、分業におよぼす<sup>(41)</sup>ものなのであった。

以上ここまで見てきたように、マルクスによれば、マニファクチュアを土台としての機械の発明とその工場への応用による機械制工場生産は、第一に、資本・賃労働という近代社会に特有の生産関係を、第二に、「自動機械の絶対的支配」<sup>(42)</sup>が貫徹することに基礎を置いた権威的秩序によって規制された工場内分業を、そして第三に、競争と無政府的秩序以外の規則が働かない国際分業と国際交換によって形成されている世界市場を生じさせてきたのであった。かかるマルクスの資本主義的生産様式に関する議論を見るならば、マルクスは決して資本主義的生産様式を資本・賃労働関係に、そして資本主義的生産様式の矛盾を工場内における資本家と賃労働者との利害関係という矛盾に縮減して資本主義的生産様式の理論を構築しようとしていたのではないことがわかる。そこで、ここでは、階級理論との関係で比較的研究の進められてきた資本主義的生産様式論における資本・賃労働の関係論や近代工場内における生産・労働過程論ではなく、競争と無政府性という性格を色濃くもつ近代社会に特有の市場論に関するマルクスの議論を、さらに深く検討することにしたい。

まず、マルクスによるこの点に関するプルドン批判に耳を傾けてみよう。プルドンは、マルクスによれば例のごとく、近代社会の市場の秩序を語る場合、競争という近代社会の市場の秩序のよい面とわるい面を挙げることによって議論を進める。マルクスによれば、プルドンの競争の定義は、「利潤を目あてとする（産業上の）はげみあいである」<sup>(43)</sup>〔（ ）内は引用者による〕というものであった。では、その競争のよい面とは何か。それは、「『競争は、価値の構成にとって、すなわち分配の原理そのものにとって、したがってまた平等の到来にとって、必要なものである』」<sup>(44)</sup>ということである。では、競争のわるい面は何か。それは、「競争は貧困をうみだす、競争は内乱をかもす、競争は『自然的地帯を変更し』、国民性をかきみだし、家庭の平和をみだし、公衆の良心を腐敗させ、道徳の観念、『正義の観念、公平の観念をくつがえす』、そして、もっといけないことには、競争は正直で自由な商業を破壊し、しかも、その代償として総合価値を、一定の正当な価格を、あたえることさえしない。競争は万人に幻滅を感じさせる、経済学者たちにさえ幻滅を感じさせる。競争はそれ自体が自滅するまでものごとをすすめる」<sup>(45)</sup>というところにある。競争は人間社会にとって本質的であり、人々の自由と平等にとっても不可欠であると信じているプルドンは、ではどのようにして競争のいい面を残し、そのわるい面を克服しようとしたのであろうか。マルクスによれば、プルドンは競争は必然的に近代的独占を生み出すが、独占誕生後に、「社会的天才」が競争のわるい面を止揚する租税体系を発明することによって解決の道が開けると論じていたという。マル

クスいわく、プルドンが論じるころによれば、「社会的天才は、……『……独占という角に到着するや、……生産のあらゆる対象に租税を課し、そして、すべての職務がプロレタリアートの手にゆだねられ、その経費が独占者たちによって支払われるようにするために一個の行政組織の全体をつくりあげる』」<sup>(46)</sup>ことになるはずなのである。このように、プルドンの市場経済の競争論は、確かに市場経済における自由競争は万人に「自由と平等」をもたらすと論じたアダム・スミスとは違って、貧困を生み出すとともに、既存の産業、社会関係、そして倫理や道徳をも解体するという競争のもつ破壊的性格を視野に入れてはいる。しかし、競争の自然必然的性格を信じ、それゆえ市場経済の自由競争をそのままにしながらそのわるい面だけを止揚しようとするプルドンの議論は、マルクスの受け入れるころのものではなかった。マルクスによれば、市場経済の競争のプルドンのいうわるい面を止揚するためには、そうした競争そのものを止揚しなければならず、そのためには、国民は「すくなくとも彼らの産業的・政治的存在条件を、したがってまた彼らの全存在様式を、根底から徹底的に変革してしまっていなければならないのである」<sup>(47)</sup>。

かかる視点を有するマルクスはプルドンの競争論をどのように批判していったのであろうか。まず、マルクスは、競争は人間社会に本質的で自然的な「利潤を目標とするはげみあい」とするプルドンの競争に関する定義を次のように批判する。マルクスは問う、プルドンは「競争は利潤を目標とするはげみあいではある。[しかし] 産業上のはげみあいだが、必然的に、利潤を目標とするはげみあい、すなわち競争であるのか？」<sup>(48)</sup>と。マルクスの考えによれば、「恋する男の直接対象が女であるならば、産業上のはげみあいの直接対象は生産物であって、利潤ではない」<sup>(49)</sup>はずなのである。それゆえ、マルクスによれば、「競争は、産業上のはげみあいではなくて、商業上のはげみあいである。今日では、産業上のはげみあいは商業を目標としてだけ存在する」<sup>(50)</sup>がゆえに、プルドンのように産業上のはげみあいを競争とし、人間社会にとって自然であり永遠不滅の原理であるかのように錯誤するものが出てくるのである。マルクスによれば、かかる錯誤に彩られている「プルドン君の(競争に関する)論理全体はつぎのように要約される。競争とはわれわれが現在そのなかでわれわれの生産諸力を発展させている一つの社会的関係である、と。彼は、競争は産業上のはげみあい、自由であることの現在のありかた、労働における責任、価値の構成〔者〕、平等到来の一条件、社会経済の一原理、運命の一指令、人間の魂の一必然事、永遠の正義の鼓吹〔者〕、分割における自由、自由における分割、一つの経済的範疇である、と主張することによって、この真理に、論理的諸展開ではなくて、しばしばみごとに展開された諸形態だけをあたえる」<sup>(51)</sup>〔( )内は引用者による〕ものなのである。この引用文にある「諸形態」の一つが、プルドンによれば、競争の否定的な側面を止揚する土台となる「独占」なのである。マルクスは、その競争と独占との関係に関するプルドンの議論を徹底的に批判する。しかし、競争から近代的独占が出てくること自身とその独占が競争の否定の側面をもつこと自身に関しては、マルクスもプルドンの主

張を肯定するのではある。すなわち、マルクスいわく、「だれでも知っているように、近代的独占は競争それ自体によってうみだされるものである」<sup>(52)</sup>。それゆえ、独占なしの自由競争だけを熱望するアダム・スミスの市場経済理論は、実践によって論破されるものであろう。しかし、スミスが独占に競争を否定する側面をのみ見たことは、近代的独占もそうした性格を有する側面がある限りでは正しいということになるだろうか。マルクスいわく、スミスが「封建的独占」について語っただけであるとすると、「プルドン君は、競争によって発生した近代的独占についてかたるだけである。しかし、われわれがみな知っているように、競争なるものは封建的独占から生じたものである。だから、そもそもの初めは、(スミスが主張するように)競争が独占の反対物であったのであって、独占が競争の反対物であったのではない。だから、近代的独占は(プルドンが言うように)たんなる反措定物ではなくて、反対にこれこそ真正正銘の総合なのである」<sup>(53)</sup>〔( )内は引用者による〕。すなわち、競争と独占との関係史は、「措定——競争にさきだつ封建的独占」<sup>(54)</sup>→「反措定——競争」<sup>(55)</sup>→「総合——近代的独占」<sup>(56)</sup>という流れとなるのである。さらに言えば、「近代的独占は、ブルジョアの独占は、総合的独占であり、否定の否定であり、対立物の統一である。純粋な正常な合理的な状態にある独占」<sup>(57)</sup>なのであった。

しかし、近代的独占が自由競争的市場経済においては「正常な合理的な状態」であるからといって、近代的独占が競争をなくすわけでも、競争の否定的側面をなくすわけでもないというのがマルクスの主張である。さきにすでに見てきたように、プルドンによれば、競争の否定的側面は独占の後に新たに出てくる租税制度によって止揚できるはずであった。しかし、マルクスによれば、そうした租税制度は、「まさに支配階級として自己を保存する手段をブルジョアたちにあたえることに役だつもの」<sup>(58)</sup>なのである。また、マルクスによれば、プルドンはもし競争の否定的側面が目に見えるようになるのであれば、政府が一片の布告さえ発すれば競争から逃れられると主張していた。しかし、同じくマルクスによれば、「競争からのがれるためには若干の布告だけで十分だ、と考えたのでは、けっして競争からのがれることはできない」<sup>(59)</sup>のである。競争から逃れるためには、競争そのものを止揚しなければならず、競争を止揚するためには、これもさきに見てきたように、競争を生み出している人々の「全存在様式を、根底から徹底的に変革してしまっていなければならない」<sup>(60)</sup>というのがマルクスの主張であった。競争から生じる近代的独占は競争をなくしも、競争の否定的側面もなくもしないだけでなく、むしろ近代的独占は競争をいっそう激しいものにし、プルドンも指摘していた競争の否定的側面をもよりいっそう強めることになるものなのである。マルクス自身のことばでさらに敷衍するならば、近代の市場経済における「實際生活においては、ただに競争と独占とこれら二つのものの敵対関係とが見いだされるばかりでなく、さらに公式ではなくて運動であるところの、これら二つのものの総合もまた見いだされる。独占が競争をうみだし、競争が独占をうみだす。いくたの独占者が競争から生じ、競争者たちが独占者となる。独占者たちが部分的な〔企業者〕

連合によって彼ら相互のあいだの競争を制限すれば、競争は労働者たちのうちで増進する。そしてプロレタリアの集団が一国の独占者たちにくらべて増大すればするほど、諸国の独占者たちのあいだの競争がますます制御しがたいものになる。[だから] 総合とはつぎのようなものである、——すなわち独占は競争という闘争をたえず経験することによってのみ存続しうる」<sup>(61)</sup> (下線による強調は引用者による) ものなのである。この引用文からもわかるように、マルクスによれば、自動機械を導入した工場における生産制度の下では、市場経済における競争は、その普遍化とその普遍化にともなう市場経済の無政府性 (=例えそれが独占者たち権力者たちであってさえも、人間の意志の力によっては物質的生活の社会的生産とその再生産の在り方を制御できないということ) を生み出し、強化していく必然性を有しているものなのである。

では、かかる独占と競争の相互作用とそこから必然的に生じてくる市場経済の無政府的性格は、マルクスの資本主義的生産様式理論の一環を成す市場経済論にとってどのような位置づけを与えられるものなのであろうか。また、それは「資本制的生産様式の必然的崩壊」を立証するというマルクスの資本主義的生産様式理論にとってどのような意味をもつものなのであろうか。さらに、それは、「資本制的生産様式」崩壊の(決して自然的ではない——著者)必然性の根拠とされる生産諸力と生産関係の矛盾の資本主義的生産様式における内実とどのように関係しているものなのであろうか。結論から言えば、独占と競争の相互作用とそこから必然的に生じる無政府性という性格を重視するマルクスの市場経済論は、自由・(生産者間・階級間・地域間いずれにおいても)生活の便益品という富(経済財)の豊富化と分配の平等化・平等・博愛という性格を重視するアダム・スミスの市場経済論のラデカルな批判であり、資本主義的生産様式の崩壊の必然性を立証するものでもあったのである。マルクスがそこでまず第一に強調することは、資本主義的生産様式の下では生産の自由はなくなるというこである。すなわち、生産者の自発的な意志や理性的な計画が彼の生産を規定するのではなく、生産手段の性格とそうした生産手段を駆使して生産する生産者間の競争圧力によって強制されて生産させられるのである。マルクスが第二に強調することは、競争による生産者間の不平等化と競争に破れた生産者の没落と賃労働者化である。また、競争に破れた産業の解体化である。マルクスが強調する第三は、工場内の労働の強化・権威的秩序の強化とそれにとともなう労働者の不自由化・貧困化である。極端な場合は、失業による労働者生活の解体化が起こる。しかも、競争に破れた生産者の没落による賃労働者化は労働者間の競争を激化させ、結果として労働者たちは不自由と労働強化による酷使を余儀なくされる労働世界にある意味で自発的に足を踏み入れざるをえなくなるのである。マルクスが強調する第四は、主要には大工業制の発展度によって規定される地域間の不均等発展と不平等化、そして地域間・国家間におけるその不均等発展にもとづく経済的・政治的支配・従属関係の生産と再生産である。それは、地域間・国家間の摩擦の温床でもある。さらに、マルクスが第五に強調することは、生産企業の短期的な利潤を求めての自然を酷使しての生産による、人間の生産と生活の普遍的で、永遠の母体である自然の破壊である。

そして、マルクスが自分の市場経済論で強調するこれらすべては、実は資本主義的な生産関係の下での生産諸力解体の諸現象でもあったのである。その極端な形態が「恐慌」なのである。しかも、そうした生産諸力の解体化現象が「恐慌」というその極端な形をとって、必然的・周期的に起こらざるを得ないというところに、マルクスは資本主義的生産様式の下での生産関係と生産諸力の矛盾および資本主義的生産様式の崩壊の必然性の根拠を見ていたのであった。

### マルクスの資本主義的生産様式没落の必然性論

かかるマルクスの資本主義的生産様式論における強調の内容を、資本主義的生産様式没落の必然性論との関わりで簡単に見ておくことにしよう。まず、資本主義的生産様式の下における生産は、とくに生産手段に機械を導入した工場制生産においては、強制された生産という性格をもつことについて、マルクスは次のように論じていた。それは、プルドンが資本主義的生産様式の下でもかつての社会においてそうであったように生産と消費のただしい比例性を要求するのに対する批判を展開する文脈での議論である。マルクスいわく、かつての社会で「ただしい、またはほとんどただしい比例に生産をたもっていたものは、なんであろうか？それは、供給を制御し、供給に先行していた需要であった。生産は一步一步消費に追隨していた。〔ところが〕大工業は、自分が自由につかっている諸用具そのものに強制されて、つねにより大規模に生産しなければならないので、もはや需要をまっているわけにはゆかない。〔それで〕生産が消費に先行し、供給が需要を強制する」<sup>(62)</sup>のであると。マルクスは、かかる資本主義的生産様式下における生産の強制された生産という性格を、『ドイツ・イデオロギー』の中では市場経済における競争論との関わりで次のように論じていた。すなわち、「大工業は、……競争を普遍化し（競争は実践における商業自由であり、保護関税はそのなかでのたんなる緩和剤にすぎず、商業自由の内部での防衛手段である）、交流手段と現代の世界市場をつくりだし、商業を支配下におき、あらゆる資本を工業資本に転化し、それによって諸資本の急速な流通（貨幣制度の完備）と集中をうみだした。大工業は、普遍的競争をつうじて、すべての個人に自分の全精力をふりしぼることをしいる」<sup>(63)</sup>ものなのである。

では、かかる「大工業」の下における強制された生産は、結果として私たち人間に何をもちたらずのであろうか。それは、市場経済社会における無政府性という性格である。そして、市場経済社会における無政府性は、第一に、工場内における労働秩序の強化と労働者たちの中での不自由の増大を、第二に、「大工業」の下における普遍的競争に敗れた産業関係者、経営者、そして労働者たちの中での生産・生活の崩壊と貧困化および地域間不均等発展を、そして第三に、生産と消費の比例性の解体化とその頂点として世界的規模で、周期的に繰り返される恐慌（この恐慌は第二のさまざまな人々の生産・生活崩壊と貧困化を最大化させる）を生み出すことになるのである。また、さらに第四には、短期的な利潤を求めての自然の搾取的な利用、乱開発によって、私たち人間の生産生活の母体であり、永遠の条件である自然環境の攪乱や破壊

を生み出すのである。そして、これら市場経済の無政府的性格が生み出す諸事態が、マルクスによれば、資本主義的生産様式の歴史的性格と没落せざるを得ない必然性を示すものなのであった。

しかし、ここで注意しておかなければならないのは、その「必然性」の意味する内容であろう。これまで少なくない人々がイメージしてきたように、人々の意志や意思に関わりなく貫徹する資本主義経済の自然必然的法則が、人々の主体的関与なしにいわば自動的に資本主義的生産様式を崩壊させるということではないということである。そうではなく、第一には、「大工業」の下では、先に見たような不自由化、生産・生活の解体化と貧困化および地域間不均等発展、そして持続的生産の条件である自然環境の破壊などなどの人々の生活を脅かすような事態を生み出す「必然性」があるということ、第二には、それゆえ、そうした事態を改善・改革しようとするならば、人々は資本主義的生産様式を変革しなければならない「必然性」におかれているということ、そして第三に、人々の生産・生活にとって否定的影響を生み出しながら展開する、しかもよりその性格を強めながら展開する資本主義的生産様式を変革し、新しい社会を建設しなければならないという必要を人々に感じさせ、現実的にも変革しようとする運動を起こさせる「必然性」があるということの意味しているのである。すなわち、マルクスによれば、資本主義的生産様式の運動下で生じる否定的影響を無くすことを欲するならば、人々は、「すくなくとも彼らの産業的・政治的存在条件を、したがってまた彼らの全存在様式を、根底から徹底的に変革し」<sup>(64)</sup>、資本主義的経済法則を自分たちの意識的なコントロールの下に服させるようにしなければならないのである。しかも、マルクスによれば、かかる変革の経験を通じてはじめて、人々は新しい社会建設の主人公に成長することができるのである。すなわち、新しい社会の主人公形成のためには、資本主義的生産様式を変革する経験は人々にとって「必然」なのである。そのことを、マルクス自身のことばで確認しておくならば、新しい社会建設の意識的諸実践の重要な契機である「この共産主義的自覚の大規模な産出のためにも、また目的とすることそのものの達成のためにも、大群の人間たちの変化が必要である。そして、こうした変化は、ただなんらかの実践的運動、なんらかの革命においてのみ、おこりうることである。したがって、革命は、支配階級が他のどんな仕方によっても打倒されないことからだけ必要なのではなく、打倒する階級が、革命においてはじめて、すべてのふるい身の汚れをぬぐいおとして、社会の新しい基礎をつくる力を身につけるところへ達しうるからこそ必要なのである」<sup>(65)</sup>なのであった。

ここまでの検討を踏まえるならば、マルクスの資本主義的生産様式没落の必然性論においては、新しい社会建設のための「大群の人間たちの変化」を実現する「革命」論がいかに重要であるかが理解し得よう。そこで、次にマルクスがかかる性格をもっている「革命」の契機をどのように構想していたかに目を転じてみることにしたい。その第一は、これまでのマルクスの社会理論研究では「革命」といえばほとんどのマルクス研究者が思い浮べるものであろう階級

対立と闘争の理論である。ここまで主要な検討の対象としてきたマルクスのプルドン批判の書である『哲学の貧困』において、最後に論じられていたのは「同盟罷業と労働者の団結」に関してであった。ここで、マルクスは、プルドンをはじめ資本主義経済法則の自然性を絶対視する経済学者たちが、労働者の「同盟罷業」や「団結」を禁止しようとする議論を批判している。そこでのプルドンや経済学者たちのその論理とは、「団結してはならぬ、団結することによって、諸君は産業の規則ただしい進歩を阻害し、製造業者が注文に応じることをさまたげ、商業を混乱させるのだ、そして、機械、すなわち諸君の労働を一部分不用なものにして諸君をしていっそう低落した賃金をうけとらせる機械の侵略を促進するのだ、のみならず、諸君はどんなにやってもむだなのだ、諸君の賃金は依然として需要される腕と供給される腕との関係によって決定されるだろう、だから、諸君を経済学の永久的諸法則に反逆させるというようなことは、こっけいでもあり危険でもある努力なのだ」<sup>(66)</sup>、というものであった。

かかる論理に対しマルクスは、「大工業」の下での先に見たような諸否定的影響の中で、とくにその影響を最も深刻な形で受けなければならない労働者たちにとっては、「いまや諸個人は、……そもそもかれらの生存を確保するためだけにでも、既存の生産諸力の総体を自分のものとしなければならないところにたちいたっている」<sup>(67)</sup>とその批判の口火を切る。続けて、そうであるがゆえに、マルクスによれば、「近代的産業と競争とが発達すればするほど、団結を促進助長する要素がますます多くなる。そして、団結が日一日と堅実さをまして一つの経済学的事実となるやいなや、それは、ただちに法律的事実とならざるをえない」<sup>(68)</sup>と主張するのであった。さらに、マルクスによれば、「大工業」の下では、「大産業がたがいに一面識もない多数の人間を一箇所によせあつめる。競争が、彼らの利害関係をまちまちにする。しかし、賃金の維持が、主人たちに対抗して彼らをもつこの共通利害関係が、反抗という同一の考えで、彼らを結合させる、——これが団結である。だから、団結は、つねに一つの二重目的、すなわちなかま同士の競争を中止させ、もって資本家にたいする全般的闘争をなしうるようするという目的をもつ」<sup>(69)</sup>ようにさせるのであった。そして、マルクスはかかる闘争を階級闘争と把握し、はじめは賃金の維持にすぎない闘争から、いずれは国家権力の奪取にいたる政治闘争にまで発展していく必然性を有しているものなのであった。

では、かかる階級闘争と資本主義的生産様式を止揚した後に出現するであろう新しい社会形成とはどのように関連していると、マルクスは把握していたのであろうか。その点に関して、マルクスは次のように簡潔に述べていた。すなわち、上述してきたような階級闘争を通してしか自分たちの生活さえも確保できないような社会的地位に置かれている「被抑圧階級は諸階級の敵対関係に立脚するいっさいの社会の死活条件である。だから、被抑圧階級の解放ということには、必然的に、あらたな社会の創造ということがふくまれている。被抑圧階級が自己を解放しうるためには、すでに獲得された生産諸力と現存する社会的関係とがもはや共存しえないことが必要である。いっさいの生産用具のうちで、最大の生産力は、革命的階級そのものであ

る。革命的諸要素の、階級としての組織は、古い社会の胎内に発生しえていた小さいの生産諸力の存在を前提する」<sup>(70)</sup>というのがマルクスの階級闘争と新しい社会建設との関連に関する把握であった。だとすると、マルクスは階級闘争の発展は自動的に新しい社会建設そのものとなると考えていたのであろうか。また、階級闘争の成就を意味するであろう革命による支配階級の打倒が実現すること、イコール新しい社会の実現、または完成と考えていたのであろうか。次に、これらの間にたいするマルクスの考えを見ていくことにしよう。

結論から言えば、マルクスは階級闘争と新しい社会建設の連関性を重視するとともに、相対的な相違、次元の違いを認識していたのである。別言すれば、新しい社会建設の階級闘争には還元され得ない独自性を、マルクスは重視していた。それは、資本主義的生産様式の止揚との関連で、生産諸力と生産関係の矛盾とその止揚をどのように展望するのかという課題と関係している。すなわち、これまですでに何度も言及してきたように、マルクスは、新しい社会への移行を生産諸手段の発展との関係で論じてきた。その中で、マルクスは、「手動粉挽車」は人々に封建社会を与え、「蒸気粉挽車」は資本主義社会を与えるとまで主張していた。この議論の延長でいけば、資本主義社会止揚後の新しい社会建設のためには、その新しい社会を私たちに与えてくれるであろう生産諸手段を発明する必要があることになろう。では、生産手段として自動機械を導入した工場生産、すなわち「大工業」が資本主義社会に対応するものであるとするならば、ポスト資本主義社会に対応する生産手段とその生産手段に対応する生産諸関係とはどのようなものなのであろうか。この間にたいするマルクスの回答は、生産諸手段の発展が社会の在り方を規定する歴史は資本主義社会までで終わりを告げ、資本主義社会を止揚し、その後の新しい社会を建設するのに重要なのは、もはや生産諸手段の単なる革新ではなくて、生産諸力の最も重要な要素であるべきはすの人間そのものの、とくに直接生産に関係している労働者の発達であるというものであった。さらに言えば、「大工業」は、単なる資本主義社会に対応する生産様式というだけでなく、資本主義社会においては労働者の不自由と貧困化、そして自然破壊を生み出してしまいが、「結合した労働者」がその生産諸力を我がものとし、「結合した労働者」の意識的なコントロールの下におくとき、それは新しい社会建設の経済学的土台に転化していくことになるはずのものなのである。

これらの点についてマルクスは、生産諸手段の発展と人間諸個人の発達との関係を踏まえての生産諸力の発展と社会の発展との関係を次のように論じていた。マルクスいわく、新しい生産手段の生産による新たな生産諸力とそれに適応した生産様式は、人間諸個人にとって、「最初は自己表現の諸条件としてあらわれ、あとでは自己表現の桎梏としてあらわれる、これらさまざまな諸条件は、歴史的発展の全体にわたってつづく交通諸形態の一連の系列をつくりあげる。そのつながりは、以前の桎梏となった交通形態のかわりに、あらたな、より発展した生産力、およびそれにともなう諸個人のすすんだ自己表現の仕方とに一致する交通形態がおかれ、それはそれで……、こんどはまた桎梏となって、また次に他の交通形態にとりかえられるとい

うところにある。これら諸条件は、どの段階でも、同時代の生産諸力の発展度に一致するのであるから、これら諸条件の歴史は、同時に、発展をつづけつつ、おのおののあたらしい世代によってうけつがれてゆく生産諸力の歴史であり、まさにそのことによって、諸個人自身が発揮する諸力の発展でもある<sup>(71)</sup>のであると。かかる「諸個人自身が発揮する諸力の発展の歴史」の視角から見ると、資本主義的生産様式における根本的矛盾の一つとして、他の時代と性格的には同じように、しかし形態的には資本主義的生産様式に固有な形をもった、「人格的個人と偶然的個人」<sup>(72)</sup>との間にある矛盾が存在する。マルクスによれば、この「人格的個人と偶然的個人との区別は、けっしてたんに概念上の区別ではなく、ひとつの歴史的事実である」<sup>(73)</sup>。そして、「この区別は、時代をことにすれば、ことなつた意味になる」<sup>(74)</sup>ものであった。

では、資本主義的生産様式の下でのこの「人格的個人と偶然的個人」との間の矛盾は、どのような固有性をもっているというのであろうか。マルクスによれば、それは、「生産諸力が諸個人からまったく独立した、きりはなされたもの、諸個人とならぶひとつの独自の世界としてあらわれるまで」<sup>(75)</sup>発展してしまった資本主義的生産様式の下では、「以前のどんな時期にも、生産諸力が諸個人としての諸個人の交通に対して、これほどまで無関係な姿をとった」<sup>(76)</sup>ことはないというところにあった。すなわち、資本主義的生産様式に先行する各時代の生産様式の下では、人格的個人と偶然的個人が幾許かは重なりをもっていた。しかし、資本主義的生産様式の下では、諸個人は、諸個人に対して無関心な姿をとって疎遠に対立する生産諸力から完全に切り離されているがゆえに、「すべての現実的な生活内容をとり去られた、抽象的な諸個人となってしまっている」<sup>(77)</sup>のである。「こうして、いまや諸個人は、かれらの自己表現に達するため」<sup>(78)</sup>にも、「既存の生産諸力の総体を自分のものとしなければならないところにたちいたっている」<sup>(79)</sup>のである。これが、資本主義的生産様式を止揚しなければならない「革命」の第二の契機なのであった。しかも、この「革命」は、政治体制の変革とは異なって、資本主義的生産様式の下で生起しながら、政治体制の変革以後も不断に継続されなければならない永続的性格をもっているものなのである。マルクスは、かかる不断の現状を変革しつづける革命運動を、「共産主義運動」と命名していた。マルクスいわく、「共産主義とは、われわれにとって成就されるなんらかの状態、現実がそれへ向けて形成さるべきなんらかの理想ではない。われわれは、現状を止揚する現実の運動を、共産主義と名づけている」<sup>(80)</sup>と。しかも、マルクスによれば、この現状を止揚する共産主義運動には、諸個人は、「諸個人として、(参加し、)相互の結合に入」<sup>(81)</sup>〔( )内は引用者による〕り、「人格的個人」としての自己表現を実現することを試みつづけるのであった。

以上、検討してきたことから分かるように、マルクスの資本主義的生産様式の没落の必然性論とそれと密接に結びついている資本主義的生産様式の止揚論は、これまで多くの論者が主として議論を集中してきた「生産過程・労働過程」における諸矛盾の激化論や労働運動論に止まるものではない、豊富な内容を有しているのである。例えば、資本主義的生産様式を止揚し

ようとする実践運動である共産主義運動の内容をとってもそのことが言える。すなわち、その内容の一つは、私的所有制度を止揚し、資本主義的生産様式の下で単なる個人としては我がものとし得ないほど普遍的に発展している生産諸力の総体を「結合した生産者たち」の意識的なコントロール下に置くことであろう。その前提として、資本家階級が支配階級になっている政治制度の変革が先行することになろう。第二には、資本主義的生産様式下における競争的市場経済の下で、アダム・スミスが夢見ていた自由・平等・博愛の実現のための社会的諸条件を解体しながら進行する産業解体・経営解体・労働の不自由化・労働者生活の貧困化・社会的不平等の拡大化に抗しながら、自由で、平等な、そして博愛に満ちた社会形成の努力を積み重ね、少しでも現実化していくことがある。かかる社会形成の実践運動の重要な一環として、資本主義的生産様式下の競争的市場経済の中で進行する社会的分業の深化にともなう（国家間をも含む世界的・全国的・地方的）地域間不均等発展と地域間不平等化、そして地域間支配とそれらから生じてくるさまざまな形の地域間摩擦・軋轢・紛争の必然化という現状<sup>(82)</sup>を打破し、変革していくという実践運動が含まれよう。また、短期的な利潤を求めての生産企業の自然破壊に抗し、持続的な生産と再生産の可能性を探求する努力も新しい社会形成運動の一環を成すこととなろう。そして、第三には、以上のような共産主義運動を通じて、またはそれらの運動とは相対的に独自に、「人格的個人」としての自己を探求し、その自己表現を探求していく運動が重要な内容となろう。そして、諸個人は、これらの内容を有する共産主義運動に、ときには労働者「階級の一員」として、ときには「人格的個人」として参加していくことになるのである。

ここまで、マルクスの人間の物質的生活の社会的再生産論を、そのキーワードである資本主義的生産様式概念とその運動に関するマルクスの理論を検討するという形で見てきた。その結論は、アダム・スミスが永遠の性格を見出ししていた、資本主義的な形態の人間の物質的生活の社会的再生産様式は、歴史的形態にすぎず、没落の必然性の中に存在しているというものであった。それゆえ、マルクスの都市と農村の関係論も、不可避的に、かかる人間の物質的生活の資本主義的生産様式の没落の必然性論の中に位置づくことになろう。とするならば、そうしたマルクスの都市と農村の関係論は、アダム・スミスのそれとは全く異なったものとなること、容易に予想できよう。そこで、次にそうしたマルクスの都市と農村の関係論を見ていくことにしよう。

### マルクスの都市と農村の関係論——「大工業」制度、地域間分業の深化、競争的市場経済、 地域的不均等発展、都市と農村の対立——

資本主義的生産様式の発展にともなう地域的不均等発展に関するマルクスの議論は、都市と農村の対立論として展開されている。マルクスの都市と農村の対立論は、ここまでの彼の資本主義的生産様式論の検討の際にも言及してきたように、生産様式の歴史的発展にともなって展

開している分業・階級対立・不均等な（近代以降は国内的、国際的）地域間発展に関する議論と密接に関係している。そこで、ここではまず、そのことを確認することから始めよう。この点に関して、マルクスいわく、「さまざまな諸民族相互間の関係は、おのおのの民族がかれらの生産諸力、分業、内部交通をどれほど発展させていたかに依存している。この命題は誰でもが認める。しかし、たんにある民族の他の民族に対する関係だけでなく、その民族自体の内部編成全体も、その民族の生産と内外交通の発展段階に依存している。ある民族の生産諸力がどれほど発展しているかは、分業の発達がどの程度かによって一目瞭然にしめされる。どんなあたらしい生産力も、それが従来既知の生産諸力の単なる量的拡大（たとえばあたらしい土地の開墾）でないかぎり、結果としてあらたなる分業をもたらす」<sup>(83)</sup>と。さらに、マルクスは続け、分業の発展は、地域間分業を含む社会的分業の発展へ、そして結果として都市と農村との分化と関係の展開に連なって行くことについて次のように言及している。すなわち、「ある民族内部の分業は、まず農耕労働からの工業および商業労働の分離、またはそれによって都市と農村の分離、および両者の利害の対立をもたらす」<sup>(84)</sup>と。また、かかる分業の発展は、同じ労働部門内部における分化と関係（含む諸階級関係）にまで展開していくことになるのである。マルクスいわく、「分業のいっそうの発展は、商業労働と工業労働との分離へすすむ。同時に、これら諸部門内部での分業によって、特定の労働にいっしょに働く諸個人のあいだにもまたさまざまな区分が発展する。これら個々の区分、相互の配置は、農耕、工業、商業それぞれの労働のいとなみ方によって規定されている（家父長制、奴隷制、諸身分、諸階級）。これとおなじ関係が、もっと交通が発展すれば、さまざまな民族相互の関係にみられるようになる」<sup>(85)</sup>と。こうして、マルクスによれば、「分業のさまざまな発展段階とは、まさに所有のさまざまな形態のことである。すなわち、分業はその一段階ごとに、労働の材料、道具、産物に対して諸個人が相互にとり結ぶ関係をも規定する」<sup>(86)</sup>のであった。

ここまでの引用によってもわかるように、マルクスによれば、生産諸力の発展に基づく分業の発展は、同じ民族内部における諸産業部門間、諸地域間、そして同じ産業内部の労働関係にかかわる諸個人間の分業の発展を生み出すとともに、それぞれの間の独特の関係様式をも生み出していくのであった。それゆえ、資本主義社会における不均等発展は、諸産業間、諸地域間、そして諸個人間（労働過程における役割関係だけでなく、所有関係を通じた生産および分配の関係も含む）の不均等発展として展開するものなのであり、それぞれが有機的な連関を有しているものと把握されていたのであった。しかも、そうした分業と交通のより一層の発展は、同じ民族内部に見られたのと同じ諸関係を、民族間ないし（近代の大工業制の下では）世界的な地域間・国家間にも生み出していくものなのである。

では、分業の発展による地域間分業の展開によって生じるとされた都市と農村の分離およびそれら両地域間の利害対立を、マルクスはどのように把握していたのであろうか。第一にマルクスは、物質的労働と精神的労働との分離・対立、別言すれば政治的支配・被支配という対

立関係を指摘している。それは、単なる生産活動内部における分業を超えた生活領域にまでおよぶ社会的分業の発展の中から生じてくる、租税収受関係とその租税を財源としてある特定の人たちによって営まれるある領域の地域空間領域内部における統治活動の不可避性に根拠をもっている。マルクス自身のことばによれば、「物質的労働と精神的労働との最大の分業は、都市と農村の分離である。……都市の成立と同時に、行政、警察、租税などの、つまり自治共同体制度〔Gemeindwesen〕の必然性が、それによってまた政治一般の必然性が生ずる」<sup>(87)</sup>のであった。第二に彼は、都市への資本と人口の集中、そして農村においてはその反対の動きである資本と人口の都市と比べての相対的と農村それ自体の歴史の中での絶対的な過疎化という都市・農村間における経済的不均等発展を指摘している。マルクスによれば、都市の成立と同時に、「直接に分業と生産用具とにもとづく人口の二大階級への分化が、まずここにあらわれた。そもそも都市が、すでに人口、生産用具、資本、享楽、要求の集中という事実であるのに対して、農村では、ちょうどその反対の事実、すなわち孤立と分散がみられる」<sup>(88)</sup>のであった。そして、第三には、土地所有と資本にもとづく経営との分離・対立である。マルクス自身のことばで言えば、「都市と農村の分離はまた、資本と土地所有との分離として、土地所有から独立な資本——つまり労働の交換のうちだけにその基礎をもつような所有の——存在と発展の始まり（近代の始まり）として把握されうる」<sup>(89)</sup>〔（ ）内は引用者による〕ものなのである。

他方では、「分業がえた次の拡大は、生産と交通の分離、すなわち商人という特殊な階級の形成であった。この分離は、歴史的にふるくから存続する都市（なかんずくユダヤ人が住みついていた）では、みるみるうちにあらわれてきた」<sup>(90)</sup>。マルクスによれば、ここから、近代社会にいたるまで、都市の手工業者や商人たち、とくに商人たちの商業の自由をもとめる要求と農村を基盤とする領主たちの支配欲求との間との間の闘争史の火蓋がきられることになるのである。この都市と農村の対立は、マニファクトゥアと大工業の出現によって、最終的に、都市の勝利によって決着がつく。マルクスによれば、「大工業は、可能なかぎり、イデオロギー、宗教、道徳などを破壊した。……それは、あらゆる文明国とそのなかのあらゆる個人が、自分たちの欲望をみたすためには世界全体に依存せざるをえない状況をつくりだし〔現在経済のグローバル化ということが言われているが、それが単なる国際的規模での経済活動というのであれば、すでにマルクスがこの文章を書いている時代には、この文章で意識化しているほどにグローバル化は深化していたといつてよい。現在言われているグローバル化の意味は、投機的なマネーゲームの国際化とそのマネーゲームの自由を阻むさまざまな諸規制を緩和するということであろう。そうした意味での「規制緩和」の大きな柱の一つとは、国家による再分配や完全雇用政策などケインズの社会保障政策の観点からの、競争主義的市場経済にたいする諸規制を、ローカルというラベルを貼ることによって解体化（「規制緩和」）することにあるのである。〕、個々の国々の従来の自然成長的な排他性（現在の「規制緩和」を旗印としているグローバル化経済が敵視している『排他性』とは、各国の勤労者・生活者たちの歴史的な運動の成果でもあ

る福祉国家的・社会保障的諸規制のことであろう)を根こそぎにした。……それは、自然科学を資本のもとに従属させ、分業から自然成長性というよそおいの最後一枚までとりさってしまった。……そして、あらゆる自然成長的關係(また福祉国家的・社会保障的という人為的諸關係まで)を貨幣關係に解消した。それは、自然成長的な都市にかえて、一夜のうちに姿をあらわす近代的な大工業都市をつくりあげた。それは、侵入した場所で手工業を、またおよそ過去の水準にとどまるかぎりのすべての工業を破壊した。それは、農村に対する商業都市の勝利を完成した<sup>(91)</sup> [〔 〕内および( )内は引用者によると同時に、マルクスの叙述の現代的な読み替えの試みでもある]のである。

この引用文を見てもわかるように、資本主義的生産様式の発展のこの段階での地域的不平等発展は、単に農業、工業、そして商業という産業間分業を基礎とした地域間不均等発展ではなく、大工業の発展差に基礎をおく不均等発展がより重要な意味を帯びてくるとマルクスは考えていた。マルクスは言う、「大工業が、ある国のどの地域においても、同じ程度まで発達するのではないことは自明なことである。……また大工業から閉めだされた労働者は、この大工業によって、大工業の労働者自身よりももっと悪い生活状態へつきおとされる<sup>(92)</sup>」と。そして、かかる大工業の発達度の違いによる地域間不均等発展は、国際的な、すなわち国と国との關係においても現われてくるのである。同じくマルクスによれば、「大工業が発達している国々は、多少とも……非工業的な国々に対して——後者が世界交通をつうじて一般的な競争戦のなかへひきこまれているかぎり——おなじような影響をおよぼす<sup>(93)</sup>」のであった。

では、この段階以降の都市・農村の対立關係はどのような展開を示していくというのであろうか。マルクスによれば、それは、これまで以上の都市への資本、人口、財産、政治・行政(政策に関する意志決定)、そして文化の集中にもとづく、都市の農村に対する優越と支配に集約的に表現されるというものであった。それを一言で言うならば、「中央集権制」という社会制度である。マルクスいわく、「ブルジョアジーは、次第に生産手段の、財産の、および人口の分散状態をなくしてゆく。彼らは人口を集合し、生産手段を集中し、財産を少数者の手に集積した。その必然的結果は政治上(文化上)の中央集権であった<sup>(94)</sup>」〔( )内は引用者による〕と。こうして、「ブルジョアジーは農村を都市の支配下に従属させた。彼らは巨大な都市をつくり、都市の人口を農村にくらべて甚しく増加させ、そして人口のいちじるしい部分を、農村生活の愚昧からひきはなした<sup>(95)</sup>」のである。さらに、かかる都市の農村に対する支配・従属關係は、大工業制の下では、先にも指摘したように、国際的な広がりを見せていくのであった。この点のマルクスのことばを引けば、ブルジョアジーは、こうして、「農村を都市に従属させたと同じく、未開国、半未開国、農業国民をブルジョア国民に、東洋を西洋に従属させ<sup>(96)</sup>」て行ったのである。

同じくマルクスによれば、かかる事態は、第一には、農村における産業解体(小経営的農業経営、副業的農村工業などの破壊等)と農業生産様式の発展にともなう農業労働力の省力化な

どによる、農村での働く場の喪失を意味していた。マルクス自身のことばで言えば、「大工業がはじめて、機械によって資本主義的農業の恒常的な基礎を与え、農民の巨大な大多数を徹底的に収奪し、家内の・農村の工業——紡績と織物——の根を引き抜いて、それと農業の分離を完成する。それゆえまた、大工業がはじめて、産業資本のために国内市場全体を征服」<sup>(97)</sup>することを可能としたのであった。

大工業制の下における都市の農村に対する支配は、第二には、都市と農村の両地域における労働者生活の貧困化を意味していた。その貧困化は、労働生活および家族・地域社会生活の両面に亘っている。マルクスの議論に依拠して、まず農村で働く場を失い、都市への移動を余儀なくされた労働者とその家族たちの生活状況について見てみよう。マルクスによれば、膨大な数の労働者たちの農村からの遊離と都市への流入は、マニユファクチュアおよび大工業による安価な搾取材料を提供し、労働者と彼らの家族生活を悲惨化させていったのである。なぜならば、農村で生きるすべを失い、都市に流入してくる労働者とその家族たちの「貧困は労働者からもっとも必要な労働諸条件——空間、光、換気など——を奪うからであり、就業の不規則さが増大するからであり、最後に、大工業と大農業とによって『過剰』にされた人々のこの最後の避難所においては、労働者の競争は必然的にその最高限度に達するからである」<sup>(98)</sup>。他方、同じくマルクスによれば、農村からの大量の労働者の流出は、農村における農業労働者たちの労働条件・生活条件を改善するものではなかったのである。確かに、「散在する小村と市場町とにおける人間群衆の稠密化は、農村の表面での強制的な人間過疎化に照応する」<sup>(99)</sup>ものである。しかし、そうした農村においても、「農村労働者たちの数的減少にもかかわらず、しかも彼らの生産物量の増大につれて生じる、不断の農村労働者の『過剰化』は、農村労働者の受救貧民の揺籃」<sup>(100)</sup>であることには変わりがないのであった。当時の都市と農村における労働者たちの労働と生活問題に関しては、労働者たちの住宅問題についてのマルクスとエンゲルスの議論が参考となろう。

さらに言えば、かかる面での都市・農村の対立は、マルクスによれば、大工業制の下では、国際的な地域間分業の深化を土台として国際的な規模で起こるのであった。しかも、その内実とは、大工業制の下における人々の物質的生活の生産と再生産の社会体制が一つの有機体的諸関係として地球規模の広がりをもっていくということであり、その中で、大工業の発展を遂げている国々がその他の国々をこの「生産有機体」の中に強制的・従属的に編入していく過程に他ならないのである。マルクス自身のことばでこの内実を確認するならば、「大工業の諸国における労働者の絶え間ない『過剰化』は、促成的な移住と外国の植民地化とを促進し、それら諸外国は、たとえばオーストラリアが羊毛生産地に転化したように母国の原料生産地に転化する。機械経営の主要立地に照応する新しい国際的分業がつくり出され、それが、地球の一部を、工業を主とする生産地である他の部分のために、農業を主とする生産地に転化させる。この革命は、農業上の諸変革と連関している」<sup>(101)</sup>のである。その後、かかる国際的分業は、単に産業

分野別の国際的分業だけでなく、資本輸出入の増大と金融市場の国際化によって資本集中と資本投資の分化と連関、そして対立関係に彩られた国際的分業の深化にまで進むことになるのである。私たちが生きている現代という時代の資本主義は、まさに、超巨大製造企業を含む多国籍企業群とヘッジファンド集団に象徴される国際的分業および通貨・金融市場の下にあると言ってよい。しかも、現代の資本主義は、かかる企業群が投機的企業群の性格をより強く帯びるようになり、それらによって主導されている金融市場が経済の主導権を握っているという、冒険的マネゲーム資本主義・カジノ資本主義であり、私たちは、これらの企業群のより一層の利潤を求めての市場開放・規制緩和・自己責任制原理を振りかざしての地球規模での地域間分業体制の再編成の嵐のなかに投げ出されていると言ってもよい。その中で、マルクスが描いた大工業制度確立期の上述のような地球規模での地域間分業体制の編成の時期とは質的にも異なった影響、産業・生活破壊の影響を、全世界の諸国およびそれぞれの国内の諸地域社会が被っているのである。

マルクスの都市・農村の対立論のもうひとつの大きな特徴は、生産様式と人間・自然関係との関連を重要な主題にしていることである。この主題は、人間の物質的生活の再生産理論の中に自然をどのように位置づけるのかということに関わっている。すでに、ケネーの再生産理論を検討したときに確認したことであるが、ケネーにとって自然は自分の再生産理論のキーワードであった。では、マルクスは、資本主義的生産様式に関する議論の中に自然および自然と人間の間をどのように位置づけていたのであろうか。この点に関してマルクスは、資本主義的生産様式について論じる中で、そのキーワードである大工業制下では、自然（環境）破壊、すなわち人々の物質的生活の社会的再生産のための根源的基盤・土台である自然の破壊が必然的に起こらざるをえないことに警鐘を鳴らしつづけていた。すなわち、マルクスによれば、大工業はもちろん、たとえそれが農業であっても、短期的な利潤を求めての資本主義的な生産様式にもとづく大農業は、土地の合理的管理ができず、地力を収奪することによって人間の生命の再生産母体である自然を破壊するのである。マルクスいわく、「大農業、および、資本主義的経営様式にもとづく大土地所有においても、所有はやはり制限として登場する。なぜなら、それは、借地農場経営者の生産的資本投下——究極的には借地農場経営者の利益にならずに、土地所有者の利益になる生産的資本投下——を制限するからである。どちらの形態においても、土地——共同の永遠の所有としての、交替する人間諸世代の連鎖の譲ることのできない生存および再生産の条件としての土地——の自覚的、合理的な取り扱いの代わりに、地力の搾取と浪費が現われる。……小所有においては、このことは、労働の社会的生産力を使用するための諸手段と科学とが欠けていることから起こる。大所有においては、借地農場経営者たちと所有者たちのできるだけ急速な致富のためにこれらの手段が利用されることによって〔それが起こる〕。どちらの場合にも、市場価格への依存によって〔それが起こる〕」<sup>(102)</sup>のである。

ここまでマルクスの資本主義的生産様式理論を基礎にした都市・農村の対立論を見てきた。

確かに、現代社会は、これまでも繰り返し指摘してきたことではあるが、マルクスの生きていた時代の資本主義社会とは異なる段階に達している資本主義社会ではある。しかし、その現代社会においてなお、マルクスが指摘していた都市と農村の対立の様相は止揚されていないだけでなく、一国内における（先進国と言われている国においても）過疎・過密問題、都市問題、自然環境破壊問題、そして国際的な規模におけるいわゆる南北問題、平和と安全を脅かす紛争・戦争の群発問題、エネルギー問題、さらに地球規模での環境破壊問題等々、マルクスの生きていた時代と比べてもより一層、マルクスが指摘していたような都市と農村の対立が激化しているといっても過言ではないのである。そこで、最後に、マルクスは、資本主義的生産様式の発展にともなって不可避免的に生じてくる、かかる都市・農村関係における対立激化の中で、どのような都市と農村の対立止揚の展望をもっていたのかについて確認しておくことにしたい。

この点について言えば、マルクスは、第一に、都市の農村にたいする文明化作用のはたす影響を重視していた。一方で、都市は農村の産業を解体し、農村の人口を農村から引き離すが、他方で、農村の人々の伝統と慣習に則って生きるだけの、マルクスのことばで言えば「愚昧」性の色濃い生活様式を変革し、彼らの「排他性」を解体してくのである。第二には、マルクスは、近代社会以降の社会における、ガス、電気、水道等々の社会的共同消費手段の発展による「共同家計」構築の展望を重視していた。そして、マルクスは、第三に、都市と農村の対立を止揚する物質的基礎と主体形成の展望に関して、次のような見通しをもっていた。マルクスいわく、「農業の部面において、大工業は、それが古い社会の堡壘である『農民』を破壊させ、彼らを賃労働者と置き換える限りにおいて、もっとも革命的に作用する。こうして、農村の社会的変革要求および社会的諸対立は、都市におけるそれらと均等化される。陳腐きわまる、また非合理きわまる経営に代わって、科学の意識的な技術学的应用が現われる。農業およびマニファクチュアの幼稚で未発展な姿態にまといついていた両産業の本源的な家族のきずな（と地域コミュニティのきずな）の解体は、資本主義的生産様式によって完了される。しかし、資本主義的生産様式は、同時に、農業と工業との対立的に形成された姿態を基礎とする、両者の新しいより高い総合（人々の物質的生活の社会的再生産の合理的、持続的、そして平和的な形態の実現）、両者の結合の物質的諸前提をつくり出す」<sup>(103)</sup>〔（ ）内は引用者による〕のであると。

かかるマルクスの都市・農村の対立の止揚の展望論に関して、さらに注意を喚起しておかなければならないことがある。それは、「都市の文明化作用」、「社会的共同消費手段」、そして「農業と工業の結合の物質的諸前提」など、資本主義的生産様式の発展は一方では都市・農村の対立を止揚する条件をつくりだしていくとはいえ、それらの条件が作動し、黙っていても、自動的に都市と農村の対立は止揚されていく、または人々が止揚する方向に変わっていくということを、マルクスは主張していないということである。むしろ、マルクスは、都市・農村の対立を止揚するような社会変革はなによりも難しい社会的事業であることを見通していたのであ

る。何が難しいかと言うと、マルクスは、資本主義的生産様式の存在様式の中核になる（産業上の競い合いである）商業上の競争とその競争から派生するさまざまな社会的領域での競争を社会的に規制していくことに見ていた。マルクスは、都市・農村の対立を止揚するような社会変革のためには、なによりもまずそうした競争を社会的に規制できる社会力を人々は獲得できなければならないのである。

競争こそが、その先に生産や生活の破綻が見えていてさえも、人々は自分だけは生き残れるであろうことを信じて生産や労働活動をつづけなければならないように強制し、駆り立てるものであるとマルクスが認識していたことについては、すでにマルクスのプルドン批判のところで確認済みである。マルクスによれば、競争がそうした性格をもつために、人々は、資本主義的生産様式の枠内でも、さまざまな形で競争を緩和したり、競争から逃れようとする試みを行ってきたものなのである。保護関税などの保護的貿易政策などもそうした試みの一つであり、マルクスが競争実践そのものである「商業的自由の内部での防衛手段」<sup>(104)</sup>と呼んだものである。ただし、マルクスによれば、かかる手段は、資本主義的生産様式の下での単なる「緩和剤」にしかすぎないものであった。さらに、マルクスによれば、周期的に繰り返される投機的利潤追求の試みさえも、それは、「産業上のはげみあいの必然からのがれようとつとめる競争の真の性格を赤裸々にしめすもの」<sup>(105)</sup>なのであった。しかし、そうした投機的な利潤追求の試みは、むしろより一層の生活不安と生活破綻の恐れを引き起こす以外のなものでもないのであるが。現代社会は、なによりもかかる競争からの逃走劇の現代版が演じられている時期にあたっていると言えよう。真に資本主義的生産様式を変革し、都市・農村の対立を止揚していくことにつながっていく競争の規制の試みとは、労働者の「団結」、すなわちマルクスによれば、「なかま同士の競争を中止させ」<sup>(106)</sup> ようという重要な目的をもつ労働者相互の結合というのがマルクスの見解であった。これらのマルクスの議論から学び、私たちは「商業的自由」に連なる競争を社会的に規制する力の獲得過程の探究をすすめることは、都市・農村の対立の止揚を展望する地域社会研究の重要な課題の一つであろう。しかし、そのことを行なうのはここでの課題ではない<sup>(107)</sup>。また、残念なことではあるが、かかる社会力を人類はまだ十分に獲得しているとは言えないの現状であろう。むしろ、投機的な利潤追求という方法によって競争から逃れようとする試みが世界的規模で行なわれているのが現代資本主義の特徴となっている。そこで、次にこのことをも念頭におきながら、投機的な利潤追求という性格が強く現われている現代資本主義の段階の下で、地域的な不均等発展が国際的規模ではどのような形で進行しているのか、また地域的な不均等発展によって余儀なくされた産業解体や生活破壊から地域社会を再生しようとする道はどのように把握されてきているのかについて節を代えて検討をすることにしたい。

- 註 (1) マルクス『哲学の貧困』高木佑一郎，国民文庫，大月書店，1974年，29～30頁。  
(2) 同上，15頁。  
(3) 同上，10頁。  
(4) 同上，30頁。  
(5) 同上，8頁。  
(6) 同上。  
(7) 同上，151頁。この引用文にある，現実の社会的生産諸関係とそれに関する経済学的諸範疇との関係に関するマルクスの指摘は，より一般的な形で言えば，いわゆる「存在と意識」との関係に関するマルクスの議論をどのように理解すべきかをめぐる論争に対しても大いなる示唆を与えるものであると思われる。ただし，そのことについては，ここでは論じる余裕がないので，他日を期すことにしたい。  
(8) 同上。  
(9) 同上，152頁。  
(10) 同上，151～152頁。  
(11) 同上，152頁。  
(12) 同上，63頁。  
(13) 同上。  
(14) 同上。  
(15) 同上，63～64頁。  
(16) 同上，64頁。  
(17) 同上，151～152頁。  
(18) 同上，152頁。  
(19) 同上，158頁。  
(20) 同上。  
(21) 同上，158～159頁。  
(22) 同上，30頁。  
(23) 同上，151～152頁。  
(24) 同上，180頁。  
(25) 同上。  
(26) 同上，182頁。  
(27) 同上。  
(28) 同上，183頁。  
(29) 同上。  
(30) 同上。  
(31) 同上，184頁。  
(32) 同上。  
(33) 同上。  
(34) 同上，185頁。  
(35) 同上，184頁。  
(36) 同上。  
(37) 同上，187頁。  
(38) 同上，185頁。  
(39) 同上，186頁。  
(40) 同上，188頁。  
(41) 同上，186～187頁。  
(42) 同上，188頁。  
(43) 同上，195頁。  
(44) 同上。  
(45) 同上，201頁。

- (46) 同上, 205頁。  
(47) 同上, 197頁。  
(48) 同上, 195頁。  
(49) 同上, 196頁。  
(50) 同上。  
(51) 同上, 199頁。  
(52) 同上, 202頁。  
(53) 同上, 203頁。  
(54) 同上。  
(55) 同上。  
(56) 同上。  
(57) 同上。  
(58) 同上, 206頁。  
(59) 同上, 196~197頁。  
(60) 同上, 197頁。  
(61) 同上, 204頁。  
(62) 同上, 97頁。  
(63) マルクス『新版ドイツ・イデオロギー』花崎臯平訳, 合同出版, 1974年, 126頁。  
(64) マルクス, 前掲『哲学の貧困』, 197頁。  
(65) マルクス, 前掲『新版ドイツ・イデオロギー』, 79頁。  
(66) マルクス, 前掲『哲学の貧困』, 229頁。  
(67) マルクス, 前掲『新版ドイツ・イデオロギー』, 159頁。  
(68) マルクス, 前掲『哲学の貧困』, 228頁。  
(69) 同上, 231頁。  
(70) 同上, 232頁。  
(71) マルクス, 前掲『新版ドイツ・イデオロギー』, 147~148頁。  
(72) 同上, 145頁。  
(73) 同上。  
(74) 同上。  
(75) 同上, 156~157頁。  
(76) 同上, 157頁。  
(77) 同上。  
(78) 同上, 159頁。  
(79) 同上。  
(80) 同上, 72頁。  
(81) 同上, 158頁。  
(82) 現在国際的な関心事になっている, アメリカとイラク・北朝鮮との間における軋轢なども, 単なる国家体制間の軋轢というだけでなく, 地域間不均等発展と地域間不平等化から生じてくる地域間の摩擦・軋轢・紛争の現代的形態と言ってよいであろう。  
(83) マルクス, 前掲『新版ドイツ・イデオロギー』, 32~33頁。  
(84) 同上, 33頁。  
(85) 同上。  
(86) 同上。  
(87) 同上, 107頁。  
(88) 同上。  
(89) 同上, 108頁。さらに, 都市の発展は, 諸都市間の分化・対立にまで進むと言えるであろう。ここでマルクスの議論のコロラリーで言えば, その根拠は, 「資本にもとづく経営」から資本と経営の分離・対立であろう。さらに, 現代社会における金融市場の発達, 資本集中地域(国・都市)と資本が投下

されるまたは引き上げられる地域（国・都市・農村）の分化・対立に基礎をもつ地域間対立を激化させていると言えよう。

- (90) 同上, 113頁。
- (91) 同上, 126～127頁。
- (92) 同上, 128頁。
- (93) 同上。
- (94) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』塩田庄兵衛訳, 角川文庫, 1963年, 40頁。
- (95) 同上, 39～40頁。
- (96) 同上, 40頁。
- (97) マルクス『資本論4』資本論翻訳委員会, 新日本出版社, 1991年, 1281頁。
- (98) 同上(3), 1991年, 798頁。
- (99) 同上(4), 1186頁。
- (100) 同上, 1186～1187頁。
- (101) 同上(3), 779頁。
- (102) 同上(13), 1989年, 1419～1420頁。
- (103) 同上(3), 867頁。
- (104) マルクス, 前掲『新版ドイツ・イデオロギー』, 126頁。
- (105) マルクス, 前掲『哲学の貧困』, 196頁。
- (106) 同上, 231頁。
- (107) この課題に関しては, 現在私たちは, 文部科学省の科研費の援助を受けて, 北海道・東北・沖縄をフィールドにして, 共同研究を行なっている。その成果の第一弾として, 北爪真佐夫・内田司編『生活の公共性化と地域社会再生』アーバンプロ出版センター, 2003年を出版している。参照願いたい。

On the Relationship between Urban and Rural Societies  
from the Point of View of Marx's Theory of Social Reproduction of Capital (8)

UCHIDA, Tsukasa

It is now generally believed by a good many rural and urban sociologists that it is an achronistic to study rural or urban societies in trying to come to terms with the antagonistic urban-rural relationship. Moreover, it is held that not only the distinction between rural and urban, but also the antagonistic urban-rural relationship have disappeared in a real sense as a result of the radical changes in rural and urban societies, especially in the midst of rapid economic growth, as seen in Japan as well.

This series of articles constitutes an argument against this position. I intend to make clear that the viewpoint of overcoming the antagonistic urban-rural relationship is still important in studying a variety of modern social problems. They include the antagonism between advanced and developing countries, international and domestic disputes, overpopulation in urban areas and depopulation in rural areas, urban social problems, environmental and energy problems, and so on, which have arisen as a result of unequal and unbalanced regional development on an international and national scale under the globalization of modern capitalism. This article is one of the series. In it, I intend to examine Marx's theory of social reproduction of capital.

Key words : globalization, modernization, unequal and unbalanced regional development, urban-rural antagonism

(うちだ つかさ 本学人文学部教授 生活構造論専攻)